

学会だより

(1) 岡山大学では改組が行なわれ、教養部が廃止されて2年目になりますが、一般科目(旧一般教養科目)の担当については、まだもめているようです。

(2) 教育学部では、卒業生の就職率をアップさせるためには学部改組が必要であるとの認識に立ち、学部の改組案が教育会議で認められ、それに基づいて文部省との折衝が行なわれておりますが、現実はなかなか厳しいようです。

(3) 数学教室では、曾布川拓也先生が“赤い糸で結ばれた”としか思われぬ女性とご結婚なさいました。また会員では、赤木 充先生(平成3年卒)、中川陽子先生(平成5年卒)がご結婚なさいました。おめでとうございます。なお、中川陽子先生は高橋陽子先生と改姓なさいました。

(4) 1995年10月28日の談話会では、本学会顧問の坂田 洵先生のグループ(廣谷真治先生(昭和61年卒)、赤木 孝先生(昭和50年卒)、岡部初江先生(昭和48年卒)、糸島耕太郎先生(昭和63年卒))による『オープンアプローチによる個を生かし、個に応じた学習指導』の研究発表があり、活発な質疑討論が行なわれました。引き続き、本学会顧問で岡山県教育委員会教育長の森崎岩之助先生(昭和33年卒)による『これからの教育』と題する特別講演があり、出席者に多大の感銘を与えました。詳しくは、本学会幹事の金光一雄先生(昭和55年卒)によるご報告をご覧ください。

(5) 本学会会則第4条に『その他、本会の目的を達成するために必要と認められる事業』を行なうことが謳われています。その事業の一つとして次の二冊の書籍を発行致しました。

『オープンアプローチと個を生かし個に応じた学習指導』、坂田 洵編著、1996年1月1日

『情報工学の基礎 微分積分』、坂田 洵著、1996年3月1日

一冊目の書籍は、談話会で研究発表なされた原稿に加筆・訂正を行なったものです。二冊目の書籍は、情報工学部の学生向けの微分積分の教科書です。これ等の書籍をご覧になりたい方は坂田先生か学会会長宛にお申し込み下さい。実費(それぞれ、500円、1,200円)で頒布致します。なお、本学会としては、今後このような書籍の発行のほかにも、『本会の目的を達成するために必要と認められる事業』を積極的に行ないたいと思っております。会員の皆様のアイデアをお寄せ下さい。

(6) 本誌の編集委員会が開かれた5月11日現在での新入会員について報告致します。次の14名の方々が新しくご入会なさいました。敬称は省略させていただきます。

小野仁美、林 俊雄、赤澤具熱、真田幸治、久保本賢、曾我真紀、武田英之、林 武、糸島耕太郎、吉廣俊三、松谷崇志、小林弘典、新宮知泰、渡辺美智子。

(7) 5月11日現在、次の会員の方々から異動のご連絡を頂きました。岡部初江先生(昭和48年卒)は津山教育事務所学事課に、洲脇史朗先生(昭和58年修了)は倉敷市教育委員会学事課に、赤木 孝先生(昭和50年卒)は倉敷市教育委員会学事課に、藤井和郎先生(昭和52年卒)は総社市教育委員会学校教育課に、新井 悟先生(昭和49年卒)は岡山県立倉敷南高等学校に、三輪 峯先生(昭和45年卒)は岡山県立岡山操山高等学校に、植月佐廣先生(昭和38年卒)は奈義町立奈義中学校に、小野 大先生(昭和58年卒)は岡山市立上南中学校に、別野智子先生(平成4年卒)は愛媛県越智郡伯方町立伯方中学校に、それぞれ移られました。

(8) 国際化時代を迎え、日本人の海外勤務が増えています。それに伴い、海外の日本人学校の必要性も増しております。小野 大先生(岡山市立上南中学校・昭和58年卒)は、平成3年から3年間、ベルギーのブリュッセル日本人学校にご勤務なさいました。そのご経験を踏まえて『派遣教員へのいざない』を執筆して頂きました。この『派遣教員へのいざない』が、海外の日本人学校での勤務を志願される会員の方々のお役に立ち、それによって国際経験豊かな教師の層がますます厚くなってゆくことを願っています。

第3回談話会について

第3回談話会を平成7年10月28日(土)午後2時～5時30分に岡山大学教育学部講義棟5307教室で行いました。今回は研究発表を1つに絞り、内容を深く掘り下げながら検討するとともに、そこから派生する問題についても話し合う形で行いました。先生方の普段の研究の成果を生かした発言が相次ぎ、意義のある会にすることができました。

それに引き続き、お忙しい中を岡山県教育委員会教育長森崎岩之助先生が特別講演をしてくださり、研修を深めることができました。森崎先生はその後の懇親会にもご出席くださり、個々にもいろいろなお話をさせていただくことができ、本当に感謝いたしております。

以下、森崎先生のご講演内容と、坂田先生のグループによる研究発表について簡単にご報告いたします。

◆ 森崎岩之助先生 演題『これからの教育』

- 今までの教育は経済を復興させるための教育だった。経済的な豊かさを求め、能率の向上(手間・スピード)を第1目標とする教育だった。人は会社を選び、その会社に入るために大学を選び、その大学に入るために高校を選び、……、ついには幼稚園まで来てしまった。これからは、人生を豊かに生きるための教育が求められている。学力だけで判断しない社会の創造が必要だ。
- 具体的な変革の方法として次のようなことが考えられる。
 - 教員の力量の向上
 - ・ 学力だけでなく人間性を大切にする教師
 - ・ 社会に出て役立つ資質を見つけられる教師
 - ・ 多面的な評価の積み重ね→教師の自信
 - 学校、家庭、地域の役割分担
 - ・ 地域の有志による具体的な提案
 - ・ 家庭内での子供の役割
 - 教育関係者以外の方も含めた会議による改革案作成
 - ・ その道のプロは考えが狭く提案がない
 - ・ 決定後その推進に力を発揮するのはその道のプロ
 - 学校から合校へ
 - ・ 基礎基本を学ぶ教室 … 論理的能力、言語的能力
 - ・ 選択して学ぶ教室 … 自由教室(体、芸、文、自然)
 - ・ 現場に出る体験教室 … 自然、ボランティア
 - ・ 学校で子供を見る目を増やす
 - ・ 新教育センターの設置 … 家庭で教育情報を取り込める、宿泊施設
 - 生涯教育
 - ・ 学習することの楽しさに気づく教育
 - ・ 学習の仕方を学ぶ教育
 - ・ ニーズに合わせた生涯教育の場の設定と指導者の育成
 - ・ 生涯教育センターの設置



◆ 坂田注先生，岡部初江先生，糸島耕太郎先生，赤木孝先生，廣谷真治先生による発表
『オープンアプローチによる個を生かし，個に応じた学習指導』

○ オープンアプローチによる学習指導とは，解決の仕方を多様にする学習指導である。これにより，子供の創造的な考えを育成するとともに，数学的な活動を育成することができる。また，解決の過程を通して，問題がさらに発展していったり，多様な解決方法を統合的に考察することもできる。子供は各自の学力，興味等によって学習を進め，創る喜びを味わうとともに，それぞれに充実感を味わうことができる。

さらに，新しい観点別評価で提唱されている関心・意欲・態度や数学的な見方や考え方の評価の具体化も可能である。

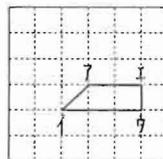
○ 新しい学力観に立つ学習指導を考えると，子供一人一人が自らのよさや可能性を發揮しながら学習を進め，それがより一層よい方向に伸びていくことを目指す必要がある。オープンアプローチによる学習指導は，問題に内在している自由性（問題の正答，解決の仕方，発展の仕方の自由性）を生かしながら，子供の主体的な活動を大切にしたい学習活動が行え，個を生かし，個に応じた学習を展開することができる。

○ 具体的な指導例

※ 下の問題を課題とした指導例についての説明がありました。具体的な指導の流れ，生徒の活動の様子と授業後の声等詳しいまとめが「学会だより」(5)の『オープンアプローチと個を生かし個に応じた学習指導』に掲載されています。ぜひお読みください。

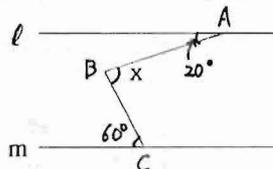
○ 小学校算数科における対称図形の指導例 - 解答が多様な場合 -

右の図のような四角形アイウエを2つ使って線対称な形をつくらうと思います。四角形のむきを変えたり，うらがえしたりしてもかまいません。できるだけ，多くの線対称な図形を，下の方眼紙にかきましょう。



○ 中学校数学科における平面図形の指導例 - 解決方法が多様な場合 -

右の図で， $l // m$ のとき， $\angle x$ の大きさをいろいろな方法で求めよう。



○ 高校における数列(自然数)の指導例 - 数学が不得意な生徒の場合 -

数字が次のようにあるきまりにしたがって並んでいる。

2, 3, 5, 8, □,

- (1) □の中にあてはまる数字は何か？
- (2) 最初から数えて10番目にくる数字を答えよ。
- (3) どのようなきまりで並んでいるか説明せよ。

(昭和55年卒 金光 一雄)

派遣教員へのいざない

1. 派遣教員とは

私は、ベルギーのブリュッセル日本人学校に平成3年から3年間派遣教員として勤務し、中学校の数学と小学校の算数を担当しました。ここでいう派遣教員とは、国外にある在外教育施設に文部省から委嘱されて勤務する教員のことで、在外教育施設の中でも義務教育である小・中学校の教員のみが文部省の派遣になります。これらの在外教育施設は、現在では世界各地に約85校あります。ブリュッセル日本人学校は生徒数約330人で在外教育施設としては大規模校になります。大規模校であっても、中学数学以外の教科を教える必要がありました。私の場合は、中学1～3年の数学と小学3年、5年の算数を担当しました。小学生を担当したのは初めてだったので、戸惑うことが多くありました。ほとんどの在外教育施設は、小・中学生あわせて50人以下の小規模校なので、校種や教科を越えて授業をしなくてはなりません。この点が苦勞するところでもあり、国内では経験できないおもしろいところでもあります。



ブリュッセル日本人学校

2. 日本人学校の様子

学校の中では、まるで日本にいるような感覚でした。日本語が飛び交い、日本語の歌声が響き、掲示板には『読売写真ニュース』などが貼られていました。国内校と違うことは、受付にベルギー人が来ることやコピー機や印刷機の修理にベルギー人が来ること、かかってくる電話の半数が英語かフランス語だということぐらいでした。想像していたよりもあまりの日本的な様子に、かえって驚きました。しかし、これは日本人が集まって日本語で学んでいるのですから、当然と言えば当然かも知れません。

授業内容についてはほぼ日本の教育内容に準じて行われていました。しかし大きな違いは、中学部では、5教科は授業時数が国内校に比べて多く設定してあったことやフランス語の授業が週2時間程度小学部から設定されていたことでした。（この現地語の授業はたいていの日本人学校で設定されているようです）

子供たちの出身地はさまざまです。国内各地はもちろん、ほとんどを海外で生活した子供も何人かいました。このようなバラエティーに富んだ子供達に接する



授業風景

ことができるのは派遣教員としての大きな魅力です。反面、保護者は海外にいるということでかなり情報不足になっているので、教科教育のしっかりできる教師や、子供の心をしっかり受け止めることのできる教師を求めています。また教員も全国各地から集まって来ています。いろいろな地域の指導の仕方などに接することができ、よい勉強になったと思います。このような集団なので教員同士のチームワークが日本人学校では特に重要で、『意見は述べるが、固執はしない』という姿勢が大切だと思いました。



文化祭（小学校2年生）

3. 派遣を終えて

この3年間の海外滞在で多くのことを学びました。日本では当たり前と思っていることも、それは普遍的な考えではないということを身をもって体験しました。例えば一番身近なことでは、隣の人は同じ文化で育った人ばかりではないということです。娘が通っていた幼稚園の同じクラスには、7カ国から子供が集まっていました。こんな中では、少々英語やフランス語が話せないということはそう大きな問題ではありません。コミュニケーションしようという意志さえあればそれは成り立つんだということを体験できたことは、外国人との交流に自信を与えてくれました。このような体験をこれからの教育に生かしていきたいと思っています。

（昭和58年卒、小野 大）



サマースクール、カヤック組
（モニターの方と一緒に）